

---

# リコの刻印

ここと

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

リコの刻印

### 【Nコード】

N1830C

### 【作者名】

ここと

### 【あらすじ】

普通の高校生の千尋は、ある少女に殺され、ある少女に生き返される。そこから始まる物語。

## 第1話：春風 1

雲一つ無い、宇宙まで見えてしまいそうなくらい青い空。

流れる河は、日の光で宝石のように輝いている。

春風が優しく吹くと、繚乱に咲き散る桜の花が粉雪のように舞い踊る。

絵に描いたような、美しい景色が広がっている沿いの道を、学生やサラリーマンの人達が歩いて行く。

そんな通学・通勤時間の真つ最中に、ブレザーの学生服を着て土手に寝転ぶ一人の男子がいる。

肩に付くほどの長めの髪がそよ風に揺れ、彼は安らかな表情で寝転がっていた。頬に当たる若草も、通行人の好奇に満ちた目も全く気にしてない。

まるで自分のベットで寝ているかのように、無防備な姿で眠っている。

彼と同じ制服を着た人達はそんな姿を見て、「起こしてきてあげなよ」とか「死んでるんじゃないの」など、笑い声交じりで話していた。

そんな中、一人の女子が声を上げる。

「——本当に死んでいるんじゃない？」

彼女が少し怯えた表情でそう言うのと笑い声が止む。そして、少しづつ悲鳴へと変わっていく。

皆が、だんだんと彼の周りが和紙に水を垂らしたように赤く滲んでいき、少年の白い肌は水銀灯のように青白くなっているのに気付いたからだ。

それに気付いた学生達が、慌てて彼に駆け寄って行く。

一方のサラリーマン達は見てみぬふりで、何事も無いように駅へ

と歩いて行ってしまう。

学生達はそんな大人達なんか気にする様子も無く、彼に必死に呼び掛ける。

しかし、そんな呼び掛けにも彼は何にも反応をしない。学生達のざわめきは大きくなっていく。

彼等は呼び掛けながら、止血をしようとしているが出血の勢いは止まらない。

誰かが救急車を呼んだようなのだが、ここまで来るには15分は掛る。

彼は死んでしまう。

そう思い、泣き崩れる女子やただ黙って見ている男子がいる中、1人だけ薄ら笑いを浮かべている女子がいた。

黒く長い髪が頬を伝い、彼女の透き通るように白い肌を強調している。

整った顔立ちというよりは、完成された顔立ちを持つ。その彼女の切れ長の目筋には、彼を見つめて、妖艶と輝く黒い瞳があった。

「全員、彼から離れて」

甲高い声が響き渡る。

すると、今まで葬式場にでもいるようだった学生達が、途端に何事も無かったかのようにその場から離れて行ってしまう。

彼等を気にする様子も無く、彼女は倒れている彼に近寄って行く。彼女は彼の横に片膝を着くと、血が止めど無く出ている胸元に、ゆっくりと手を乗せる。

「こんにちは、千尋君」

笑顔でそう言っと、彼女は近くに生えていたタンポポの茎を片方の手でちぎり取る。そして、それを指先で摘み、目の前で竹トンボ

のようにクルクルと回す。

「タンポポの花言葉って知ってる？タンポポの花言葉はね『別離、思わせぶり』なのよ——嫌な言葉よね？」

どこか嬉しそうな表情をしてそう言うと、彼女は手に持ったタンポポを彼の胸元辺りを目掛けて弾く。

タンポポが彼女の手から離れた瞬間、一輪の突風が吹き、視界が霞むほどの桜吹雪が起こる。

すると、彼に向かって落ちていたタンポポはその場から消えてしまふ。

彼女はそのオカルトマニア達なら泣いて喜ぶような怪奇現象にも全く動じる様子も無い。ただ不気味な笑顔を浮かべて、突風で乱れた髪を直している。

髪を直し終わると、白いハンカチを取り出し血まみれになった手を拭く。すると、ハンカチは固まりかけの溶岩のような、どす黒い紅色に染まってしまふ。

「残念ね、もう彼は生き返るわよ」

彼の胸元に広がる血の海には、1枚の黄色い花びらが船のように浮かんでいた。

彼女は遠足中の小学生のような楽しげな顔をして、人差し指で花びらを血の中へと沈めていく。

「止める！！！」

女性にしてはちょっと低めのアルトの声が響く。すると、突風と共に黒いマントで身を包んだ少女が、倒れている彼を挟んで彼女の向かいに現れる。

少女の年齢は15、6才ほど。整った顔立ちをしているがどこか幼さの残る、柔らかな輪郭をしている。そんな中にある、鋭く吊り

上った大きな青い瞳は今日の空のように透き通っていてとても印象的だった。

後ろで1つに結わった金髪は、絡むことなく桜の花と共に風に舞っている。

少女は大きな瞳をさらに広げ、こめかみからは青筋が浮き出し、怒りをあらわとしていた。

「そんな怖い顔じゃあ、千尋君の目覚めが悪いわよ、リコリス」  
彼女は彼の頭を撫でながら、姑のように嫌味ったらしく言う。  
リコリスと呼ばれた少女は彼女を睨みつける。

「黙れ！！」

大声を出すリコリスに、彼女はわざとらしく驚く。

「あらあら、恐い死神さんねえ、千尋君？」

生暖かい風が吹き、リコリスの黒いマントが揺らぐ。

第1話：春風 1（後書き）

感想下さい

## 第1話 春風 2

拳を握り絞め、リコリスは少しうつむいてしまう。

そんなリコリスの姿を見た黒髪の少女は不気味な笑顔を浮かべ、ゆっくりと口を開く。すると、リコリスは途端に握り絞めていた拳を開き、慌てて耳を塞ぐ。

その様子を見た黒髪の少女は少しため息を付き、お年玉が少なかった子供ような不機嫌な表情になってしまう。

「もう、私の戯言を防ぐ力も残って無いのね」

「——っ！」

リコリスの表情が陰しくなる。そして、慌てて後ろに下がり、マントの中へと手を入れる。

「止まりなさい、リコリス」

リコリスがマントの中から何かを取り出すよりも早く、黒髪の少女の高い声が響く。すると、リコリスはマントの中に手を入れたまま、石像のように固まってしまう。

「勝てる見込みも無いってことぐらい、あなただって分かってたんでしょ？」

黒髪の少女の皮肉にも、リコリスは反応することすら出来ない。

唯一動くことのできる、マントと髪の毛が、虚しく風に揺られている。

「——詰まんないの」

「……うん？」

血まみれで倒れている千尋が、ゆっくりと目を覚ます。

自分が死にかけていた事も、2人の不思議な女性に囲まれているとも知らずに――ただ普段の様に身を起こし、大きく伸びたまま、呆然と空を眺めていた。

そんな彼の姿を見た黒髪の少女は、手を叩いて大いに喜ぶ。

「おはよう、千尋君」

その声には彼は首を傾げ、ゆっくりと声のした方へと目線を下げる。  
「……え？」

目線の先にいる見ず知らずの黒髪の美しい少女を見ると、彼は頬をほんのりと赤らめる。

その姿を見て、彼女は満面の笑みで、千尋に抱き着く。

「ちよつ！！！！？」

女性への免疫がないんだろう、千尋の顔が茹でた蟹のように紅く染まり、固まってしまふ。

彼女はそんなこと気にもする様子もなく、彼の血の付いた胸元に手を伸ばす。そして、さらに顔を真っ赤にした彼の目の前に、彼女は血みどろになった手をやると、耳元でそっとささやく。

「見て千尋君、あなたは殺されたのよ」

彼は彼女の言葉よりも、血みどろの手に驚き、少し後退りする。そして、自分の胸元を確認するために目線を落とす。

彼の視界に、血が大量に付いたベージュのブレザーが入る。それを見た瞬間、彼の漫画のように真っ赤だった顔が、倒れていた時のように青白くなっていく。

「覚えてないだろうけど、あなたは3日前にそこで固まってる死神さんに、間違つて殺されたのよ」

彼女は彼に見せていた血みどろの手で、リコリスの方を指差す。彼の首が古い歯車のようにゆっくりとリコリスの方を向く。彼女の言った通り、彼の記憶の中にリコリスの事は無いようだ。

彼は目を細めて、リコリスを見つめる。

「3日前……？」

「そうよ、3日前」

耳元でささやかれるのも気にせずに、彼はうつむき3日前の事を思い出そうとする。そんな彼を、彼女は満足気な表情で見つめる。

「――痛っ!」

彼は片手で軽く頭を押さえると、うつむいたまま、もう一度リコリスの方を向く。すると、すぐに彼の表情が険しくなる。

「無理よ、その時の記憶は消されちゃってるから」

彼女は優しく彼の背中をなでながら、言う。そして、さらに続ける。

「彼女は間違つて殺したあなたに、3日間の命しかあげなかったの。それで、今日死んじゃったのよ」

「……」

彼は険しい表情のまま、彼女の話聞いていた。

「それを私が同情して、生き返してあげたの。だけど、私が気付かなかったらそのまま死んでたのよ――酷い話よね?」

彼女は彼に向かってではなく、固まっているリコリスに向かって皮肉気味に言う。

彼はそうとも知らずに、青ざめた顔を手で覆い、絶滅の淵に立たされていた。それは、突然自分が死んでいたなどと聞かされたならば普通の反応だろう。

彼女はそんな彼の耳元で優しくささやく。

「一緒に世界を変えない?」

うつむいていた彼が、少し反応する。すると、彼は顔を上げて、微笑んでいる彼女を見つめる。

その顔はさつきまでの険しい表情ではなく、目を皿のように丸くした、啞然とした表情だった。

「この世から、死を無くしましょう」

彼女はにこやかに微笑みながら、血の付いていない方の手を差し出す。彼は差し出された手に戸惑い、再びうつむいてしまう。

その時、場に少し冷たい風が吹く。すると、彼女の目線がリコリスの方を向く。

「な、め……るな」

突如、固まっているリコリスの目の前に、バスケットボールほどの風の弾が3つ現れる。それは黒髪の少女を狙い、プロ野球選手が投げる球のような速さで真っ直ぐ飛んでいく。

「——！？」

黒髪の少女はそれに気付くと、慌てて千尋を突き飛ばし、その場を離れる。千尋はそのまま倒れてしまう。

真っ直ぐ飛んでいた弾は軌道を変え、再び彼女を目指して飛んでいく。

「追尾なんて出来たのね」

彼女に焦りの表情はなかった、むしろドッジボールでもやっているかのような楽しそうな表情だった。

すると、固まっているリコリスの顔に血管が浮き出てくる。

「千尋君、逃げて！」

リコリスの異変に気付いた黒髪の少女は珍しく焦り、そう叫ぶ。

千尋は言われた通りに、慌てて逃げようとする。

「無駄……だ」

突然、突風がリコリスの背後から吹く。すると、その場にいたりコリスと千尋の姿が消えてしまう。

黒髪の少女を追っていた風の弾も消え、彼女はその場に立ち尽くす。リコリスには逃げられたが、彼女の顔はどこか嬉しそうだった。彼女はその場で大きく深呼吸すると、周りを見回す。

「隠れてないで、かかって来なさい」

そうつぶやくと、彼女の周りにリコリスと同じような格好をした、2人の男性が現れる。

それを見た彼女は不気味な笑顔を浮かべていた。

第1話 春風 2（後書き）

できれば、感想下さい

## 第2話 リコ 1

店が5軒ほど列なる、3階建ての商業ビル。

その一角には、何処にでもあるような普通の喫茶店があった。

店内にはショートヘアーで20代後半ぐらいの女性店員が1人いるだけで、客の姿は1人も見当たらない。朝のピークは過ぎたようだ。

カウンターの中にある洗い場には汚れた皿が何枚も入れられており、散乱とした客席にはコップや皿が置いてあった。しかし、女性店員は片付けようとする様子も無く、ただ客席で煙草を吸いながら休暇をしている。

どうやら1人で朝のピークを乗り切ったようで、彼女の額と首周риには汗がにじんでいた。

「……もう、閉めるか」

そうつぶやくと、彼女は啜えている煙草を灰皿に押し付ける。すると、彼女は机を支えにして立ち上がり、ズボンのポケットから何かを取り出す。

それは、雪ウサギのようなキーホルダーが付いた鍵だった。彼女はそれを指でクルクル回しながら、早足でドアの前へと行く。

彼女はドアを少し開けると、半身を乗り出し、修羅のような形相で周りを確認する。

「今来た客は、ぶつ殺す！」

彼女はドアに吊るされている”open”の札を素早く裏返し”closed”にする。そして、力一杯ドアを閉めると、ドアの下と取っ手の下に付いている鍵を、残像が残るような速さで閉めていく。

鍵を全て閉め終え、しっかりと鍵が掛かっているか確認する。確認を終えると、鍵を再びポケットの中に入れ、満面の笑みを浮かべて店の奥へと行く。

よほど休める事が嬉しかったんだろう、彼女は少しスキップをしていた。

「開けて」

突然、外から少年のか弱い声がすると、彼女はその場で立ち止まる。

「もう、閉店でーす」

彼女は振り返ることも無く、その場で大きな声でそう言う。

そして、彼女は再び歩き出す。しかも、わざと相手を怒らせるように、大な足音を起てて。

「美子さん、僕だよ！」

外の少年は慌てた様子でドアをノックしながら、そう叫ぶ。

彼女はその声に立ち止まり、振り返る。すると、磨りガラス状のドアには、少女をお姫様抱っこした少年がドアをノックしている姿が写っていた。

それを見た彼女は、首を傾げながらドアへと近づいていく。すると、彼は安心したのか、ドアをノックするのを止め、大人しくなる。彼女はドアの前まで行くと、ポケットから鍵を取り出す。そして、ドアの上下に付いている鍵だけを開ける。

「どうしたの、美子さん？早く開けてよ」

彼女の表情が険しくなる。

「……どなたですか？」

いかにも相手を疑っているような、刺のある言い方をする。その時の彼女は、まるでヤクザのような目付きで、拳をにぎりしめ、臨戦態勢に入っていた。

そんなことを知らない彼は、彼女の言葉に首を傾げている。

「その、藍口 千尋です」

彼女の顔色が変わる。

慌てて彼女は最後の鍵を開け、ドアを開ける。するとそこには、

肩につくほど髪が長く、女性のような顔をした、いかにも頼りがいの無さそうな少年が立っていた。

その腕の中には、長い金髪を一つに結わった少女が目を閉じて、しっかりと彼に抱かれている。

彼女はその2人をまじまじと観察すると、少し青白くなった顔で、ゆっくりと口を開く。

「ねえ、千尋……あんた、何したの？」

たぶん彼女は、少女が死んでいるとでも思ったのだろう。彼女の声は、明らかに震えていた。

「——とりあえず、中に入れて」

彼は少しいつむきながら言う。すると、彼女は戸惑いながらもドアの前を退き、彼を店の中へと入れる。

店の中に入ると、彼は抱えた少女を近くの椅子にそっと座らせる。そして、両腕で胸元の辺りを押さえ、ドアの前で立ち尽くしている彼女の方へ行く。

「僕、布団敷いてくるから」

彼がそう言うと、呆然としていた彼女がビクツと反応する。

そんな彼女を他所に、彼は歩き始める。すると、彼女は慌てて彼の肩を掴む。

「その子ってさあ、生きてるの？」

彼女は真剣な面持ちでそう言うと、彼は少し戸惑った様子で口を開く。

「えっと、た、たぶん」

彼は話を終わると目線を外す。それを聞いた彼女は、真剣な表情のまま、早足で少女の前まで行く。

すると、彼女は近くにあった大量の水と氷が入ったポットを手に取ると、それを少女の頭の上で逆さにする。

ポットを逆さにすれば当然のように、ポットに入った水と氷は少女の頭に降り注ぐ。

「うお!!!!!!!!!!?」

少女は勢いよく立ち上がると、目をはち切れるほど大きく開け、慌てた様子で周りを確認する。

「何してるの、美子さん！！？」

彼は思わず大声を上げる。しかし、彼女はそんなこと全く気にする様子は無かった。むしろ、彼女は嬉しそうな顔をしていた。

「……私、シャワー浴びて来る」

そう言っていると、彼女はそそくさと店の奥へと姿を消す。

彼は少し戸惑った様子で少女に近寄る。

「その、大丈夫ですか？」

びしょ濡れになった少女は鬼のような剣幕で、彼を睨みつける。

「うるさい！！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1830c/>

---

リコの刻印

2010年10月8日15時29分発行